

生者と死者の分離

—新石器時代の北レヴァントとアナトリアにおける埋葬分布と副葬品の分析—

増森 海笑 D.

Separating the Living and the Dead:

An Analysis of the Distribution of Burials and Grave Objects of the Neolithic Northern Levant and Anatolia

Kaisho D. MASUMORI

本論では、北レヴァント地方とその周辺地域の先土器新石器時代B期から土器新石器時代における埋葬行為の展開を示した。分析は当該領域の諸遺跡における埋葬人骨の空間分布と、装身具を中心とする副葬品の利用形態という二つの属性に着目して行った。その結果、1) ハルーラ遺跡とアシュクル・ホユック遺跡では床下埋葬の被葬者が装身具を伴っている例が多いこと、2) 両時期の遺跡で建物内に数十体以上の人骨が埋葬される場合にはその被葬者に副葬品が伴わないこと、3) 集落内に墓地が形成されていたテル・エル・ケルク遺跡では装身具の利用が生者に限定されており副葬品利用の割合は低いこと、が明らかになった。

これらの結果は、当時の社会において生者が死者をどのように表示していたのかを明らかにしている。PPNB期には死者を生者と同様にアイデンティティを有する存在として取り扱っており、世帯を単位とした祖先崇拜が行われていたと考えられる。しかしケルク遺跡では、空間分布と装身具利用形態の面から、死者が生者の世界とは切り離された形で認識されていたことが示唆された。死者の取り扱い方や認識の差異の背景には、経済基盤だけでなく社会組織編成の志向性の相違があったと考えることができる。

キーワード：新石器時代、装身具、埋葬人骨の分布、アイデンティティ、象徴的表現

This paper focuses on the mortuary practice and related uses of burial objects in the northern Levant and Anatolia from the PPNB to the Pottery Neolithic period. Analysis concentrated on two attributes: the spatial distribution of burials and the use of burial objects, particularly personal ornaments. The following points were made clear by this study: 1) At Halula and Aşıklı Höyük burials, a large number of bodies were buried underground with personal ornaments. 2) At burial sites from the PPNB to PN periods, there are instances where more than several dozen bodies in the same structure are not adorned with body ornaments. 3) At Tell el-Kerkh, where a cemetery was constructed within the village, the use of body ornaments was limited to living people, and burial objects were used only on a small scale.

These results indicate the way in which the dead were regarded by the living in the society of the time. During the PPNB, it is thought that the dead were treated as having the same kind of identity as the living, and ancestor worship was practiced by household units. At Tell el-Kerkh, however, judging from the spatial distribution of burials and the use of burial objects, we can see that the living and the dead were recognized as occupying separate worlds. It is possible that differences in economic infrastructure and social organizations and populations were reflected in the ways in which the dead were regarded by the living.

Key-words: Neolithic, personal ornaments, distribution of burials, identity, symbolic representation

1. はじめに

人間の身なりはその個人の社会的アイデンティティの構築に大きな役割を果たす。しかしながら、先史時代の人びとが利用していたであろう衣服は、残存している例がきわめて限定されている。したがって、彼らがいかに身体を表

示していたのかを探る考古学的手段は、多くの遺跡から安定的に出土する装身具の分析にかかってくる。装身具は高い社会性と象徴性をもつ道具の一つであり、それらの種類や装着の仕方によって多様な意味を表現するような利用形態がこれまでの民族学の研究で明らかにされている（例え

ば、Eicher 1998; Janowski 1998)。

装身という行為は自らの身なりを改変する行為であり、それは他者への自己の表示が一義的な機能となる。民族誌の情報をそのまま過去の社会に援用することはできないが、人びとが自らをどのように表示し、他者をどのように認識していたのかを考えるうえで、装身具は重要な知見を提供する資料となりえるのである。

そのような装身具は新石器時代では石製ビーズの形をとることが多く、埋葬人骨に伴って出土する例が知られている。衣服や装身具で身体を表示することによって、その個人は自らのアイデンティティを他者に認識させることが可能となる。このような前提にたてば、副葬という生者による死者の装飾行為は、その死者が社会の中でどのように位置づけられていたのかを示すと同時に、死者をどのように扱うのがその社会において適切な処置であると考えられてきたのかを明示する。生前に身に着けていた装身具がそのまま副葬される例もあろうが、それは埋葬行為に参加した人びとによって、故人がそのような装身具を着装するにふさわしい人物であると捉えられていたことを示している。つまり埋葬行為には常に被葬者個人ではなく、埋葬行為に従事した者の意向が大きく反映されているのである。

社会の中で死者をどのように取り扱い、いかに表示するのかは、人びとの集団への帰属意識や社会的アイデンティティが構築されるうえで非常に重要な要素であったと考えられる。そのような視点でみると、副葬品としての装身具の研究は当時の人びとのアイデンティティを考えるうえで二重の意味で重要であることが分かる。つまり、人びとのアイデンティティの物的表示装置としての装身具が、埋葬行為という特殊な社会的コンテキストの中でいかに死者を表示するのかという問いを立てることによって、当時の人びとが死者をどのように捉え、社会の中に位置付けていたのが明らかにできるのである。

このような問題意識のもと、本論の主眼は土器新石器時代のテル・エル・ケルク (Tell el-Kerkh) 遺跡に形成されていた集落内墓地の意味を捉え直すことにある。墓地とはここでは数十体以上の埋葬人骨が集中して分布している一定の空間を指す。特別な空間へ多くの死者が埋葬されることの意味をここで問いたいと思う。そこで本論では埋葬行為のなかでもとくに装身具などの副葬品利用に着目し、その様態を他遺跡と比較することによってこの遺跡における墓地形成の意義を浮き彫りにすることを意図している。またこの一連の過程で装身具研究のもつ可能性を示すこともねらいのひとつである。

2. 埋葬行為研究と装身具研究の方向性

埋葬事例研究

西アジアの新石器時代研究では分厚い蓄積の中で様々なテーマが論じられているが、近年積極的に議論されているものの中に儀礼活動に関する研究が挙げられる。90年代以降に資料の蓄積が進んだことも手伝って、特殊な遺構がもつ機能の考察や (Horwitz and Goring-Morris 2004; Verhoeven 2002b)、特徴的な埋葬行為の意味を解釈する研究がこれまで盛んに行われてきた (Garfinkel 1994; Kuijt 2000; Russell and Düring 2006)。

西アジアの新石器時代には埋葬の事例がそれ以前の時期と比べて多くの遺跡で確認されるようになる。とくに頭骨の取り扱いは特徴的であり、頭骨を外して埋葬したものや、外した頭骨を1カ所に集めたもの、プラスターによる復顔行為などが認められ、それらの機能や意味を考察したものは枚挙に暇がない (例えば、Goren et al. 2001; Kuijt 2000, 2008)。しかしながら、これらの研究では埋葬行為がもつ特殊な部分に目を向けてその意味を解釈しようとするばかりで、埋葬行為全体を捉える試みや基礎的な分析が充分に行われてきたとは言いがたい。埋葬行為をより多角的に理解するためには、副葬品をはじめとした埋葬をめぐる様々な属性に十分に留意する必要があるだろう。

副葬品は被葬者のアイデンティティや社会的な位置づけを示すという、埋葬行為における明確な物質的表示機能を有するにもかかわらず、これまで分析の主たる対象とされることは少なかった。特殊な埋葬行為の展開やその分布といった研究は数多くなされているにもかかわらず、副葬品はそれらの埋葬行為研究のなかで副次的な扱いにとどまってきたと言える。副葬の慣習は決して西アジア新石器時代全体で確認されるものではないが、のちの銅石器時代にはほとんどの遺跡で副葬品が確認されるようになる (小泉 2001: 表 1, 3, 4)。このことから、副葬品は埋葬行為全体の中で大きな役割を果たすものであると言え、分析の対象とする価値のあるものだと思われる。

装身具の研究

この時期に副葬品として主に利用されるのはビーズを中心とした装身具である。石製のものを中心に、骨製のものや貝製のものを連ねてネックレスのように利用されていたことが想定されている。では副葬品利用に限らないこれまでの装身具研究にはどのようなものがあるのだろうか。

装身具の考古学的研究は多く知られており、アイデンティティの表示と関連した研究がローマ時代のブリテン島などで行われているが (Eckardt 2004; Jundi and Hill 1998)、西アジア先史考古学における装身具研究の蓄積は浅いと言わざるを得ないのが現状である。遺跡から出土す

る装身具は簡単な報告こそされるものの、それをもとにした分析や考察などは積極的に行われておらず、ましてや遺跡単位を超えてそれらを相互比較した研究は管見に触れない。

しかしながら新石器時代の装身具も最近になって様々なアプローチが試みられるようになり、数は少ないながらも既存の研究は三つの方向性に大別できる。一つ目は、装身具の製作技術を明らかにするために微細な観察や製作実験を行うもの (Belcher 2011; Calley and Grace 1988; Wright et al. 2008)、二つ目は、装身具の素材となった貝などの原産地を推定することによって人びとの資源獲得範囲や物資の交換活動の復元をねらったものである (Bar-Yosef Mayer 2005; Bar-Yosef Mayer et al. 2010)。そして近年注目される第三の方向性として、装身具利用の象徴的・社会的背景を明らかにすることを目的としたものが挙げられる (Bar-Yosef Mayer and Porat 2008; Wright 2009; Wright and Garrard 2003)。

この装身具研究の第三の方向性のなかで新たに発表されたのが、テル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡を対象にした I. カイト (Kuijt) らによる論考である (Kuijt et al. 2011)。彼らはこの遺跡で見つかった埋葬人骨の年齢と空間分布、そしてそれらに伴う装身具を中心とした副葬品の相関を分析することで新石器時代集落における世帯の自律性の向上を論じた。彼らの研究によれば、PPNB 中期には副葬品の利用形態は被葬者の年齢 (成人/子供) に強い相関があったとされる。しかし後期になると年齢による違いがなくなる一方で、埋葬された住居ごとに副葬品利用が大きく異なることが示された。報告者はその変化が世帯の分節化・自律化を意味しているとしており、その傾向はコミュニティ内の階層化の萌芽だと解釈している。近年は世帯を対象とした研究が活発に行われており (例えば、Byrd 2000; Düring and Marciniak 2006; 門脇 2009)、それらの多くは貯蔵施設や建物構造との関連で分析を進めていたが、別の新たな視点を模索する研究としてこの論考は注目に値する。

上に示したように、この数年の間に装身具研究は多角的な方向から行われるようになってきた。しかしながら、その蓄積は未だに浅く、装身具の利用形態を遺跡間で比較考察するような論考はほとんどみられない。そのような新石器時代の装身具研究の現状に鑑み、本論では副葬品の利用形態を中心にして観察することで、人びとのアイデンティティの表象について考察を加える。先史時代における副葬品の利用形態の分析を通じて、彼らの死生観やアイデンティティのあり方にも触れたい。

なお、本論ではテル・エル・ケルク遺跡で検出された埋葬人骨と副葬品の分析に主眼をおいている。そのため、比

較対象はその周辺地域である北シリアと南東・中央アナトリアに位置する PPNB 期から土器新石器時代の遺跡に限定し、そのなかで埋葬人骨と副葬品の全体像が捉えられる数遺跡を選定した (図 1)。

3. 埋葬人骨の分布と装身具副葬の関係

西アジアにおける副葬品の利用はナトゥーフ前期 (12,500-11,000 cal. B.C.) でわずかに見られるものの、ナトゥーフ後期 (11,000-9700 cal. B.C.) から先土器新石器時代 A 期 (9700-9200 cal. B.C.) にはほとんどの遺跡で副葬品の利用が途絶えてしまう。南レヴァント地方では PPNB 期 (9200-7000 cal. B.C.) になっても副葬品の欠落した状態が継続するが、北レヴァント地方やユーフラテス河中流域の諸遺跡では副葬品を伴う埋葬人骨が多く検出されている。PPNB 期～土器新石器時代初頭 (7000-6500 cal. B.C.) のこの地域における埋葬行為を観察すると、大きく二つに区分できることが分かる¹⁾。

ユーフラテス河中流域に立地しているハルラ遺跡は前 7500 年頃の PPNB 中期から継続的に居住されていた遺跡である。この遺跡は約 7ha の範囲に広がっており、ヤギとウシの家畜化やエンマーコムギの栽培化の痕跡が認められている (Molist and Faura 1999)。この遺跡で検出された全ての埋葬人骨は計 16 軒の住居の床下に掘られた墓坑に個別に埋葬されており、人骨の総数は 114 体にのぼる (Guerrero et al. 2009; Kuijt et al. 2011)。被葬者はビーズを連ねたネックレスやプレスレットなど豊富な副葬品を伴っており、全埋葬人骨の半分以上に副葬品が伴うという特徴がある。この遺跡では検出された全ての建物内の床下で埋葬人骨が見つかり、その墓坑が掘られた場所にも共通性が認められるなど、集落内で埋葬行為に関する一定の規則があったことがうかがえる (図 2)。また中央アナトリアに位置する PPNB 期の大規模集落遺跡であるアシクル・ホユック (Aşıklı Höyük) 遺跡では、1989 年から 1993 年の調査で約 400 基の建物遺構とともに 70 体の埋葬人骨が見つかった (Esin and Harmankaya 1999; Özbek 1998)。これらは全て建物床下から検出されたものであり、29% の人骨に装身具などの副葬品が伴っていたことが報告されている²⁾。特に石製ビーズとこの時期には珍しい銅製のビーズはほとんどすべてが埋葬人骨に伴って見つかった。

これら二つのよく似た埋葬行為のあり方をハルラ型とすると、近隣の遺跡では異なる埋葬行為が展開していることが分かる。

PPNB 期のテル・アブ・フレイラ (Tell Abu Hureyra) 遺跡では 102 体の埋葬人骨のうちの 44% に装身具や骨製・フリント製品の副葬が確認された (Moore and Molleson

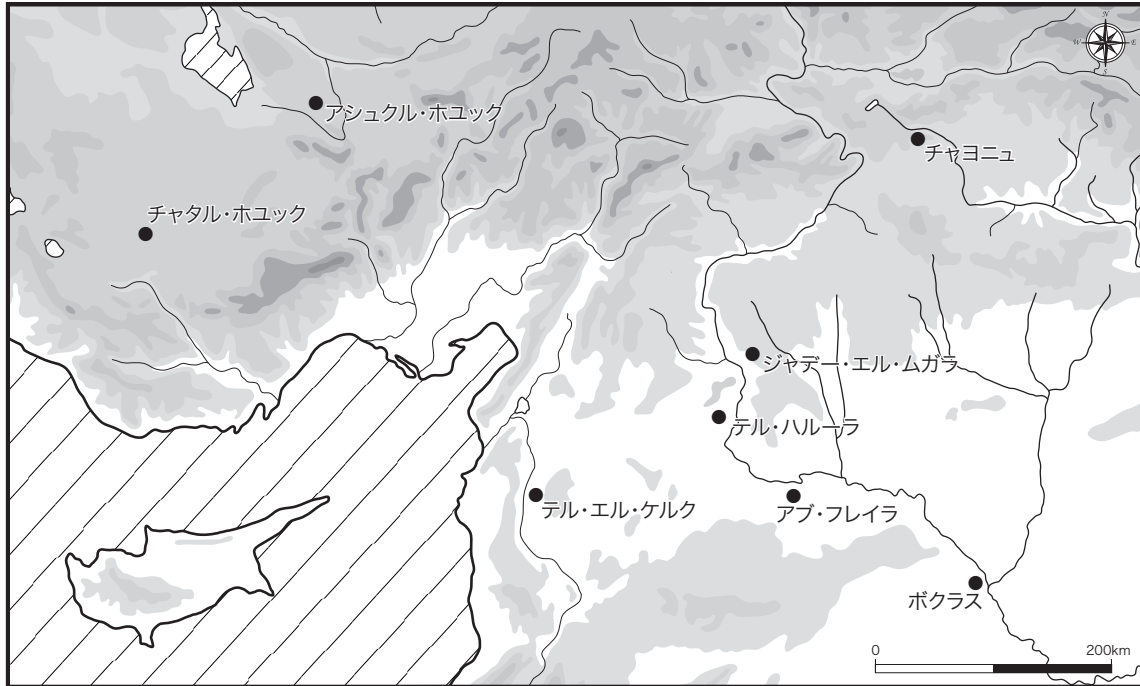


図1 本論で言及する諸遺跡の位置

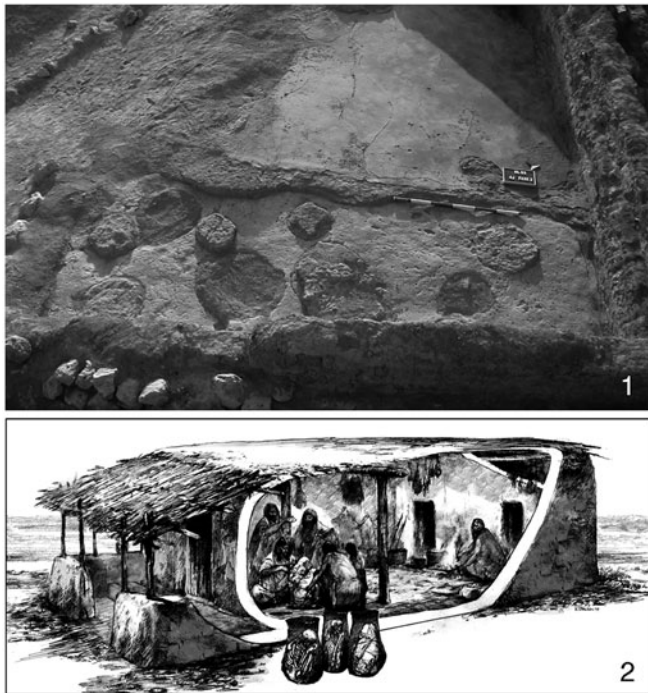


図2 ハルラ遺跡における床下埋葬の様子 (1: 墓坑検出状況
2: 想像復元図) (Guerrero et al. 2009 より引用)

2000)。トレンチ B フェイズ 8 の 1 軒の建物はプランや規模こそ他の住居と変わらなかったが、その床下に掘られた墓坑 (pit 144) には 21 体の人骨が合葬され、納骨部屋 “charnel room” と呼ばれる部屋からは二次葬を含めた 24

体以上の人骨が一括で見つかった (図 3: 1)。明らかに一軒の住居の利用者よりも多い人数が埋葬されていることから、ここは埋葬専用の建物であったと考えられる。副葬品の利用はこのような一次葬と二次葬を含めた大規模な埋葬ではほとんど認められず、個別の一次葬に伴うことが多い。一方で精巧に作られたバタフライ形ビーズはほとんどすべてが埋葬人骨に伴って出土するなど (Moore and Molleson 2000: 291)、一部では死者を丁寧に葬る風習があったことがうかがえる。同様の事例は、アブ・フレイラ型である南東アナトリアのチャヨニユ (Çayönü) 遺跡で 450 体以上の埋葬人骨が検出された建物 “skull building” に求めることができる (図 3: 2)。この遺跡でも専用の建物内への埋葬行為が支配的であるものの、副葬品の利用は限定的であり、確かな例は他の建物へ埋葬された 27 例しかない (Davis 1998)。そのうち 10 点以上の副葬品を伴うものは 4 例に限られており、副葬の慣習が一般的なではなかったことがうかがえる。中央アナトリアに位置するチャタル・ホユック遺跡は PPNB 期から土器新石器時代に利用された遺跡であり、数多くの埋葬人骨と装身具の検出が報告されている。遺跡内では積極的な装身具製作が行われていたことが想定されているが (Hamilton 2005)、その利用は副葬に限定されるものではない。ここでは近年の発掘だけで 4,300 点を超える大量のビーズが見つまっている。それらの多くは遺跡の覆土や建物の床面など多様なコンテクストから得られたものであり、装身具の多様な利用形態を示唆している。

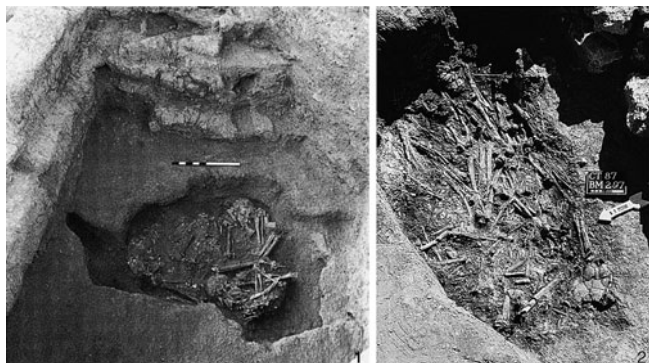


図3 アブ・フレイラ型遺跡における多体葬の様子
 (1: アブ・フレイラ遺跡 pit 144
 2: チャヨニュ遺跡 skull building BM1 pit)
 (Moore and Molleson 2000; Özdoğan 1999 より引用)

埋葬人骨はほぼ全てが建物内から検出されており、その中での副葬品を伴う割合は18%と低い。ほかにもユーフラテス河中流域に位置するボクラス (Bouqras) 遺跡やジャデー・エル・ムガラ (Dja'de el-Mughara) 遺跡からも建物内から多くの埋葬人骨が検出されているが、それらに副葬品が伴う例はほとんど確認されていない³⁾ (Akkermans et al. 1983; Coqueugniot 1999)。

4. テル・エル・ケルク遺跡における埋葬行為と副葬品

テル・エル・ケルク遺跡はシリア北西部のルージュ盆地内に立地するテル型の大規模な集落遺跡である。この遺跡では、1997年から筑波大学シリア考古学調査団 (団長: 常木 晃) とシリア・アラブ共和国ラタキア文化財局が合

同で発掘調査を行っており、現在でもこの調査は継続されている。3つのテルからなるこの複合遺跡は、PPNB期からビザンツ時代までの断続的な利用の痕跡が確認されている。その中でも PPNB 期から土器新石器時代まで居住されていたテル・アイン・エル・ケルクでは、約 224 体の埋葬人骨や大型の建築遺構などが見つかり、新石器時代の社会構造を復元するうえで有効な資料を提示している (図 4)。

この遺跡から得られた装身具は 1,300 点を超える。それらのほとんどは製品中央に穿孔が施されたビーズであり、石製のものが圧倒的に多い (図 5)。ほかの素材には貝製、骨製のものが利用されているがその数は限定的である。これらの装身具のうち埋葬人骨に伴う形で出土したものは 425 点を数える⁴⁾。石製ビーズをはじめとする装身具は遺跡全体から多く出土しているものの、副葬品として利用されていたものは限定的である。ケルク遺跡では 224 体の埋葬人骨のうち、何らかの副葬品が伴っていたものが 53 体 (23%) であり⁵⁾、装身具を副葬品として伴っていたものに限定するとその数は 37 体 (16%) にまで低下する⁶⁾。副葬品の点数が 10 点を超えるものは 6 体 (3%) にとどまり、厚葬の慣習がほとんどなかったことは明らかである⁷⁾。

このように副葬品としての装身具利用は確かにこの遺跡において限定的であるが、それは必ずしも装身具の利用機会自体が少なかったことを意味するものではない。1300 点以上という出土数の多さもさることながら、それらの素材や形態をみると、装身具の製作から利用に至るまでに多大な労力がかけられていることがうかがえるのである。装



図4 ケルク遺跡における墓地のひろがり
 (筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団 2011 より引用)

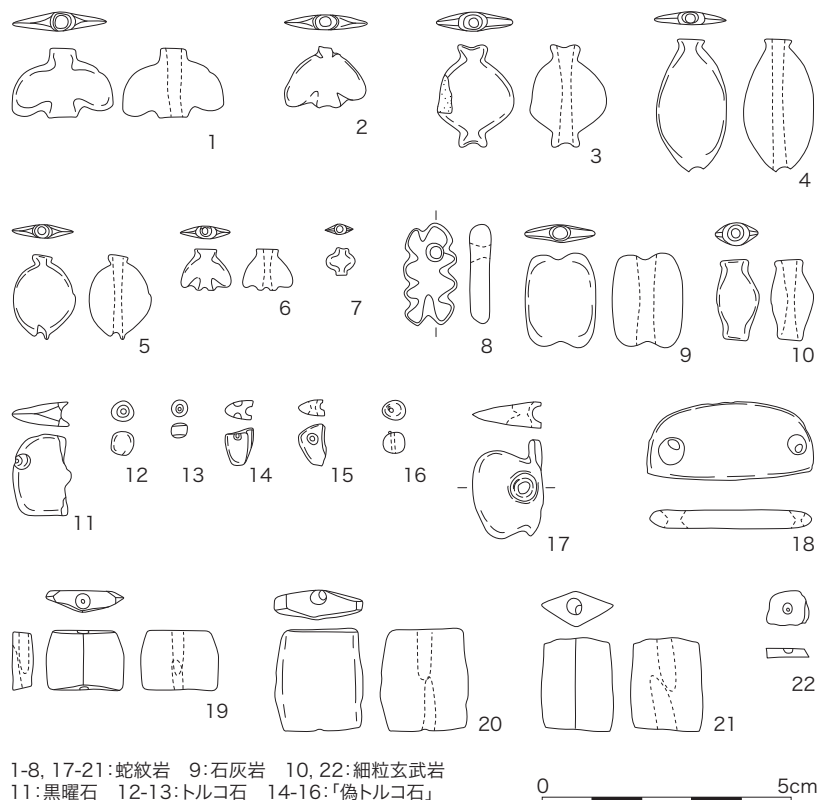


図5 ケルク遺跡から出土した石製装身具の一例

身具には非常に多様な素材が利用されている。遺跡近隣から採取したと考えられるフリントや石灰岩、地中海沿岸地域で入手できる蛇紋岩（約200点）、シナイ半島といった遠隔地でしか入手できないトルコ石（約50点）やアナトリア産の黒曜石（5点）など、石製ビーズのなかでも多様な石材が使われていることが分かる。他には動物骨や歯牙に穿孔を施したものや、ツノガイやタカラガイといった貝製のものも多数出土している。また、トルコ石の模倣品と思われる製品も少ないながら出土しており⁸⁾ (Taniguchi et al. 2002: 180)、この遺跡に居住していた人びとの技術力の高さとともに外来の希少な素材の装身具に対する執着心の高さを示唆している。

さらに積極的な装身具利用の傍証として挙げられるのが、再利用品の存在である。半分に割れてしまったビーズに別方向から穿孔を施すなどして再び垂飾機能を取り戻したものが、とくに蛇紋岩製のバタフライ形ビーズに多く認められる（図5: 14, 15, 17, 18）。これらの製品は壊れた装身具をそのまま廃棄するのではなく、繰り返し利用していたことを物語るものであり、装身具が特別な取り扱いを受けていたことを示している。

さらに蛇紋岩製ビーズの未製品が一括で出土した例もある。粗く成形され、途中まで穿孔された14点の蛇紋岩素材が、フリント製ドリルとともに一括で検出されたのであ

る（図5: 19-21）。墓地との直接的な関連はないものの、このことは装身具の素材獲得と製作工程において集約的な物資管理が実施されていたことを物語っているといえる。

このようにケルク遺跡では装身具の数量や品質の面で特別な注意を払っていることが見受けられるものの、その利用は死者への副葬という形をとることが他の遺跡と比べて少なかったことは明らかである。

5. 埋葬人骨の分布と副葬行為の3類型

ここまでPPNB期と土器新石器時代に属する北レヴァント地方とその周辺地域の遺跡における埋葬と副葬品の状況を概観してきた。その結果これらの諸遺跡の埋葬行為は大きく3つに区分できることが明らかとなった。その様子をまとめたのが図6である。

PPNB期の中でも、ハルーラ型にあたる二遺跡の埋葬行為とアブ・フレイラ型の諸遺跡のそれは大きく異なっている。ハルーラ型は全ての人骨が建物内に埋葬されていること、そしてそれらの埋葬行為に装身具をはじめとした副葬品が高い頻度で伴っていることがその特徴である⁹⁾。とくに詳細な報告がなされているハルーラ遺跡の例では、全ての建物内に土坑墓が掘られており、そこに埋葬された人骨は最大13体にのぼる (Guerrero et al. 2009: Table 1)。さらにこの遺跡では検出された建物16軒の全てが同様のプ

ランとサイズで構築されていただけでなく、建物内の埋葬がメインルームの手前部分に限定されることも全ての建物で統一されていた。これらのことはハルーラ遺跡の社会が高度に組織化されていたことにとどまらず、空間利用と埋葬行為に関する厳格な規制が存在していたことを物語っている。建物内の墓坑は密集しているものの、それらの全てが互いを壊すことなく掘られている。そして墓坑を掘り続けて住居内に十分なスペースがなくなると、建物を同じプランで建て直し、再び同じ手法で死者を葬っていた。カイトらが指摘したようにPPNB中期から後期にかけて社会内における世帯の位置や関係性は変化しているように見受けられるが、それでもそれぞれの建物は埋葬行為と深く結びつく形を保持していたと言える。

PPNB期から土器新石器時代にかけてみられるアブ・フレイラ型の諸遺跡では、建物内に数多くの遺体が埋葬されているものの、その扱いはハルーラ型のそれとは大きく異なっている。一次葬と二次葬を含む多くの遺体が一箇所にまとまって埋葬される一方で、他の建物の床下などにも埋葬人骨が伴う例が多い。まとまって埋葬される人骨には副葬品がほとんど伴わず、一部の被葬者にのみ特別な扱いが見て取れるのがこのグループの特色である。副葬品で飾られた被葬者は老若男女に及んでいるため、年齢段階や性差による顕著な差は現状では捉えられない。まとまった埋葬は墓地の萌芽を思わせるものである一方で、別の地点に副葬品を伴って埋葬された遺体は、ハルーラ遺跡などで見たように生者と死者の結びつきが部分的には強力に維持されていることを示唆する。例えばチャタル・ホユック遺跡では数多くの人骨が建物内に埋葬されている。しかし建物当たりの埋葬人骨数には大きな偏りが認められることには注意が必要である。近年まとめ直された分析によれば、54軒中7軒で25体以上の埋葬が確認されており、この7軒

だけで247体(461体中の54%)が検出されている(Düring 2003)。さらに埋葬に利用される建物は全体の20%しかないとも報告されていることから、建物間でのプランや規模の差こそ認められないものの、当時の人びとの間で明確な空間の利用形態および空間認識の違いがあったことは明白である。これらの遺跡での副葬品のあり方を考えると、二次葬を行う際にかつて人骨とともに埋葬した副葬品を回収した可能性もあるだろう。それによって副葬品の出土頻度に差が出ていることも確かに考えられるが、はっきりしたことは分からない。ここではそのような副葬品の回収が行われていた可能性は、むしろ死者と装身具の象徴的な結びつきが失われていたことの証左であると理解したい。

土器新石器時代のケルク遺跡では集落内墓地というこれまでの埋葬行為の展開のなかで認められなかった新たな形態が出現していた。少量の副葬品をもつ被葬者も一部で確認されているものの、死者の多くは副葬品をもたずに埋葬された。床下埋葬の数が激減するとともに、集落内の空閑地に非常に多くの人骨が埋葬されるようになり、空間分布の面からみても一大画期であったことは明らかである¹⁰⁾。また多くの副葬品をもつ被葬者もわずかに見つかったのはいるものの、それらの墓地内の配置や頭位方向などに他の個体との明確な違いは見いだせない¹¹⁾。

ここで重要なのは、装身具の副葬品利用があまり見られなくても、集落における装身具自体の利用はむしろ積極的に展開していることである。ケルク遺跡における卓越した装身具利用は上で述べた通りであるが、他の遺跡でも同様の事例が挙げられる。例えば土器新石器時代のチャタル・ホユック遺跡では埋葬に伴わない圧倒的多数の装身具が多様な素材で作られていることが明らかになっており(Hamilton 2005: 326)、土器新石器時代になると装身具の形態や素材が多様化している傾向が見て取れる。

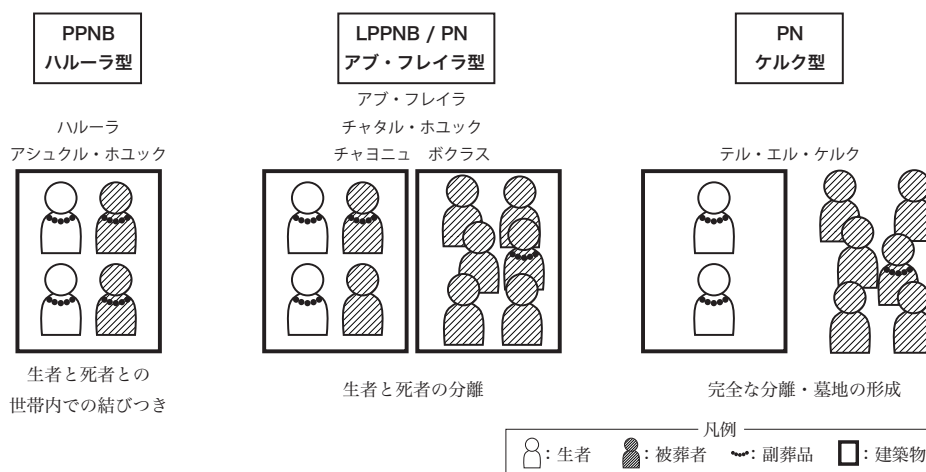


図6 各遺跡における埋葬人骨の分布と副葬品利用の模式図

表1 PPNB期から土器新石器時代における各遺跡の埋葬行為の比較

時期 遺跡名	M/LPPNB テル・ ハルーラ	MPPNB アシュクル・ ホユック	M/LPPNB テル・アブ・ フレイラ	PPNB チャヨニュ	LPPNB/PN チャタル・ ホユック	LPPNB/PN ボクラス	PN テル・エル・ ケルク
埋葬場所	建物内のみ	建物内のみ	建物内外	建物内	建物内	建物内のみ	集落内墓地
埋葬遺体数	114	70	102	600+	94	7	224
建物内 埋葬数	114	70	○	559	○	7	5
副葬された 埋葬遺体数	71	14	45	27	17?	1?	53
埋葬遺体中 の副葬割合	62%	20%	44%	5%	18%	14%?	24%
副葬品 総点数	1087	○	—	120	—	—	495
装身具 総点数	○	○	○	—	4300+	1000+	1300+
主な参考 文献	Guerrero et al. 2009; Kuijt et al. 2011	Esin & Harmankaya 1999; Özbek 1998	Moore & Molleson 2000	Davis 1998; Özdoğan 1999	Andrew et al. 2005; Hamilton 2005	Akkermans et al. 1983	常木 2011; 常木・長谷川 2010; 村上 2008

○：非常に多い —：不明

ハルーラ型では死者は生者と同一ようなアイデンティティをもった存在として扱われていたことが装身具のあり方から明白である。遺体を入れた墓坑が切り合わない形で継続的に建物内埋葬が行われていたことは、生者が生活空間の中で死者の存在を意識しており、そこに埋められている個人を明確に認識していたことを示している。世帯の構成員は死後も世帯内にとどまりつづけることが明確な形で表示されており、世帯が高い自律性を有しながら、時間的な履歴を主張していた。これは当該領域で広く認められる祖先崇拜の現れであり、生者が死者と同一の空間を共有することで祖先との結びつきを明示しているのだと解釈できる。

アブ・フレイラ型の遺跡では部分的にハルーラ型でみられたような死者の取り扱いがみられるものの、大多数の人骨は専用の建物内に埋葬される。チャタル・ホユック遺跡のようにこれらの建物は建設当初は居住機能を有していた可能性もあるが、一定の時間の経過とともに明らかに死者のための空間として認識されるようになっていった。ここに埋葬された死者に副葬品がほとんど伴わないことは、死者と生者の分離が空間利用の面でも装身具利用の面でもあらわれていたことを意味している。死者を生者とは異なる存在であると認識し、専用の建物内で死者の世界を構築していたのであろう。そこでは生者の世界で用いるようなアイデンティティの表示はむしろ邪魔なものとして取り外されていた。しかしアブ・フレイラ遺跡のように大型のバタフライビーズの副葬など、ハルーラ型以上に手厚く葬られた人骨もわずかに確認される。その被葬者が社会内でどの

ような位置付けであったのかは不明であるが、なにか特別な位置を与えられた存在であったのかもしれない。このようなアブ・フレイラ型において副葬品をもつ遺体にはジェンダーや年齢差による違いが認められるとしている報告もあるが¹²⁾、そのような意見に真っ向から反対する考えも提示されており被葬者の社会内での位置付けの検討には慎重さが求められる (Düring 2003; Guerrero et al. 2009; Moore and Molleson 2000)。

そして、ハルーラ型では明確にあらわれていて、アブ・フレイラ型でもみられたような、死者と生者が緊密な繋がりを有していて死者の存在が生者によって明確に記憶・表示されていた様子はケルク型では認められない。この遺跡では埋葬が複雑に切り合っており、頻繁に「片付け」を兼ねた二次葬が行われていたと考えられる。葬送儀礼に参加している人びとが、過去に埋葬した個人やその場所を明確に認識していないことの現れとも言える。

儀礼研究の大家として度々引用される R. ファース (Firth) は儀礼を定義する際に、「(儀礼とは) 人間社会のコントロールのための様式化された行動の一種であり、象徴的な性質で実証不可能な対象を主に扱い、概して社会的な拘束力をもつものである」¹³⁾ と述べている (Firth 1951: 222)。これに従えば、埋葬行為にはそのコミュニティに暮らす人びとが、社会をいかにコントロールしようとしていたのかという志向性が少なからず内包されていると考えられる。つまり本論で示したような埋葬行為の様相は、つまるところ死者をどのように取り扱うことがその社会にとって適切であると考えられてきたのかを明示しているのであ

る。

死者が血縁集団の中における祖霊としての位置を与えられていたハルーラ型と、死者を血縁集団の枠にとどめずに他界へ送るべき存在として認識していたアブ・フレイラ型の諸遺跡。そして死者を他界へと位置づけて生者との間に明確な区分を設けるケルク型埋葬行為。これらの諸遺跡では埋葬行為の担い手や社会的な位置付けが異なっていたと考えられる。

ハルーラ型の遺跡では死者は各々が居住していた住居に埋葬されたと考えられる¹⁴⁾。つまり埋葬行為の単位は個々の世帯であった。世帯内に死没した祖先を位置付け、彼らを生者と同じように装飾して死者の個性を明示する社会は、やはり積極的な祖先崇拜を行っていたと考えるのが自然であろう。あくまでも世帯内で行われる埋葬行為は、決してコミュニティ全体に表示されるものではなかったはずであり、被葬者の存在を日常的に意識するのはその世帯の構成員に限定されていたと考えられる。

アブ・フレイラ型の埋葬行為は部分的には個別の世帯にとられながらも、世帯の枠を大きく超えた形で行われていた。埋葬行為は屋内で行われることが主だが、それはもはや世帯を単位としたものではなかった。それぞれの居住する世帯内でも埋葬行為は行われており、それらには副葬品が伴うことも多い一方で、埋葬専用の建物を利用することによって大規模にコミュニティ内の構成員を埋葬することが可能であった。これらの埋葬専用の建物に埋葬された人骨は、二次葬が多いという事情もあるものの、多くの場合に副葬品を欠いているものであった。ここでの被葬者は特定の個人という位置付けをなされていなかったのである。アブ・フレイラ型の遺跡ではこのように特定の建物を利用した埋葬行為を行うことで死者を総体としてコミュニティ全体に表示していたのではないだろうか。そこでは死者はアイデンティティを剥ぎ取られた記号として存在していた。死者はそれぞれの世帯から供出され、公共の死者の家に埋葬された。生者と死者の人格的・象徴的な関係は大部分で失われ、個体の死はほとんどの場合他界へ送られることを意味するようになった。本来居住に用いるはずの建物を死者のために利用するという埋葬行為のあり方は、生者の世界の一角を死者に明け渡すという形での両者の分離があったことを示している。

そしてケルク型の埋葬では、死者は生者とは異なる空間へ送られるべき存在であり、異なる表示をすることが適切な処置とされた。埋葬した人骨の「片付け」など頻発することは、ケルク遺跡において個々の被葬者への特別な注意が少なくとも継続的には払われなかったことを示している。ここでの埋葬行為が被葬者のアイデンティティを隠匿するものであったことはアブ・フレイラ型と同様であるが、

最も異なるのはその徹底ぶりである。多様な装身具製作・利用が一般的であるにもかかわらず、それらの副葬利用が非常に限定的であることは死者の取り扱いを端的に示している。装身具を着装している個人が死没した際には、そのような製品は一次葬や二次葬の際に取り外されてしまったのであろう。そのように個性を失った死者が行き着く先は、埋葬専用の建物ではなく、空闲地の墓地であった。生者と死者はあらゆる面で繋がりが絶たれており、死者がよりどころとならないようなコミュニティが形成されていたと考えられる。この遺跡で見つかった火葬の痕跡は、そのような埋葬行為のなかでのコミュニティ全体に向けた新たなディスプレイの一形態として位置づけられるかもしれない。

6. 結論

最後に本論で得られた見解をまとめ、今後の展望と課題を示しておきたい。

本論ではケルク遺跡で展開されていた埋葬行為の意味を従来とは異なる形で理解すること、そしてその過程を通じて装身具研究の重要性を提示することが目的であった。そのためにこれまであまり分析される機会の少なかった副葬品の利用形態を、埋葬人骨の空間分布と関連させる形で観察してきた。

ケルク遺跡とその周辺地域に位置するPPNB期から土器新石器時代の諸遺跡を、埋葬人骨の空間分布と副葬品利用形態という視点でみると、ハルーラ遺跡に代表されるハルーラ型と、アブ・フレイラ遺跡やチャタル・ホユック遺跡に代表されるアブ・フレイラ型、そしてケルク型の三者に区分することができた。ハルーラ型では、装身具を多く伴った形で建物床下への埋葬行為が比較的小規模に行われており、住居プランや埋葬行為の規範などの点で集落内が組織化されている様が見て取れた。一方のアブ・フレイラ型では副葬品を伴う個別埋葬は一部で確認できるものの、副葬品を欠いた形での埋葬行為が専用の建物内で大規模に行われていた。

さらにケルク遺跡では空闲地に非常に多くの人骨が埋葬されるものの、これらの人骨と副葬品の共伴は限定的であることが特徴である。副葬品のあり方は全く異なる様相をみせるものの、装身具の製作・利用が埋葬に伴わない形で積極的に行われていたことは明らかであり、装身具の利用対象者が生者に限定されていたことを示唆している。

このように埋葬行為をめぐる空間利用と装身具利用には、遺跡ごとに大きな違いがあったことが分かった。この違いはすなわち生者が死者とどのような関係を構築していたのかを端的に示している。ハルーラ型では死者を生者の近くにおいて、生者と同様にアイデンティティの表示を

行っていた。アブ・フレイラ型では大規模な埋葬行為を皮切りにして死者が生者とは異なる存在であると認識され、死者が生前もっていたアイデンティティは隠匿されていた。ケルク型における墓地の形成はその最たる例であり、空間利用の面でも装身具利用の面でも死者は生者とは全く異なるあり方を示していた。地面に穴を掘って死者を埋めるという現象面はあらゆる遺跡で共通しているものの、その意味を考えたときにそれぞれの型でみられるこれらの埋葬行為は、本質的には全く異質のものであったのである。

このような埋葬行為の相違を生み出した背景は何であろうか。その考察は困難を伴うが、これまでの議論で提示されたような社会経済的側面を重視した所有権表示の有無という考えに (Bienert 1991; 常木 2010)、ここでは集団編成のあり方という視点を加えたい。ハルラ型で認められたような埋葬行為は血縁集団内における時間を越えた強い結びつきを明示している。たとえ世帯の構成員が死没しても、その単位内で明確なアイデンティティを有する存在として取り扱われることが集団内であらかじめ約束されているのである。換言すれば、建物内に居住している人びとは埋葬の慣習を連綿と受け継いできており、自らの存在が時間的履歴に裏付けられたものであると認識することが可能であったと言える。このような社会は小規模の血縁集団の結びつきが何よりも重要視されていたことをうかがわせる¹⁵⁾。実際ハルラ遺跡では埋葬人骨のミトコンドリアDNA分析が行われており、血縁関係が同一住居内だけでなく、住居や層位が異なる人骨でも確認された (Fernandez et al. 2008)。このデータは埋葬行為にみられる均質性を裏付けるものであろう。一方アブ・フレイラ型やケルク型では公共的な機能を有していたと考えられる大規模な遺構が検出されることが多く、集団としての規模が比較的大きいことが想定される。そのような社会のなかでは、埋葬行為は世帯単位で行われるのではなく、コミュニティ全体のイベントとして特定の空間で行われていたことが考えられる。世帯の結びつきを強調することによって世帯間の格差が露わになることよりも、死者を集落全体で一つの空間に入れることによって、死者を個人ではなく総体としてディスプレイしていたと考えられる。ケルク型の埋葬では死者が特定の建物に位置づけられないことから、死者との関係をより希薄なものにしようとしていたのかもしれない。

そして重要なことは、これらの埋葬行為のあり方は一方から他方へ変遷するものではないということである。埋葬行為のあり方はその社会の構成員にとって重要な関心事のひとつであったはずであり、それは必ずしも時期や地域で単純に括れるようなものではあるまい。その社会における重要な観念が埋葬行為を通じて表出されているのであり、それは多様な形態を呈するはずである。時間と共に発展し

ていくような図式では埋葬行為の本質を捉え損なってしまうだろう。

本論では装身具自体の仔細な分類に入り込むことなく、それらの出土状況を観察することによって人びとのアイデンティティの表出の描写を試みた。しかしながら、これらの装身具が人びとにとってどのような意味をもつものであったのかを明らかにするためには、製作技術の復元や素材の詳細な同定を行う必要がある。また、現状では埋葬人骨の詳細な位置やそれに伴う副葬品の情報なども明示されることが多くない。このような基礎情報が整備されれば、遺跡間の比較もより多角的な視点で精細な分析を行うことが可能となるだろう。本論では資料的制約のなかで、ひとつの問題提起を行った。それは装身具利用形態という新たな視点で埋葬行為を観察することによって、時期や地域に縛られない多様な遺跡のあり方が理解できるというものである。本論では素描にとどまったが、資料をより充実させて稿を改めることで、装身具利用形態の社会的背景に迫りたいと思う。当時の人びとのアイデンティティや象徴的なふるまいを考えるうえで、埋葬行為とそれに伴う装身具利用は重要な手がかりとなりえるだろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、ケルク遺跡の資料を使用することを許可していただいた発掘隊長であり筆者の指導教官である常木晃先生に厚く御礼申し上げます。

また、ここではケルク遺跡出土の未公表資料を用いていますが、本論の見解は全て筆者の個人的なものであり、ケルク遺跡調査団を代表するものではないことをご留意ください。

註

- 1) 本稿ではケルク遺跡における墓地形成時期の様子を捉えるのが目的であるため、前6千年紀のハラフ文化などは考察の対象に入れていない。
- 2) 建物遺構の数と比較すると埋葬人骨の数が少ないように見えるが、報告者によれば炉が構築されている建物内からは約8割の割合で埋葬人骨が検出されており、ここでも居住施設と埋葬との間に結びつきが認められる (Düring 2005)。
- 3) ボクラス遺跡では建物内から検出された7体のうちの1体に多くの装身具が伴っていたものの、報告者はこの遺体をそこで殺害された人物として解釈しているため、副葬品ではないと考えている (Akkermans et al. 1983)。
- 4) 副葬されたビーズの点数自体は多いものの、425点のうち294点は1体の成人女性 (Str. 1087) に伴ったネックレスを構成するビーズである。
- 5) 副葬品の認定基準については議論があるものの (Belfer-Cohen 1995)、ここでは埋葬人骨付近の一定範囲内から出土したビーズなど特殊な遺物をその遺体に伴う副葬品であると認定している。
- 6) 集骨葬に伴う形でわずかに副葬品が出土する例があるものの、着装した個人を特定するのが困難であるため、それらは数には含めていない。
- 7) 石器製作に用いる多くの道具とともに埋葬された例 (Str. 1058)

- や 294 点のビーズからなるネックレスが首元から出土した例 (Str. 1087) のような副葬品をおおいに利用していた様子がうかがえる事例も確認されているものの、それらの割合は墓地全体でみるとあまりに小さいものである。
- 8) マンガンと鉄を含んだ遷移金属の化合物を歯牙や骨に塗布して、600°C で加熱することによって青く発色するという実験結果が得られている (Taniguchi et al. 2002: 180)。
 - 9) アシュクル・ホユック遺跡全体では副葬品の利用割合は高くないものの、出土した装身具のほとんどが副葬利用されていることを考慮し、ハルラ型に分類した。
 - 10) 当遺跡の資料はまだ分析途上であるため、本論では埋葬人骨の帰属層位などについて厳密な区分などは設けていない。今後分析が進むと墓地の形成過程と照応する形でさらなる考察が可能になるかもしれないが、ここではそういった議論には立ち入らない。
 - 11) 筆者は以前ケルク遺跡の装身具副葬の様態を取り上げた際に、多くのビーズを伴う遺体が確かに存在し、それらが子供と成人女性に多く見られる傾向を指摘した (増森 2011)。その傾向に誤りはないものの、埋葬人骨全体をみたときに複数のビーズを伴うような例があまりに少ないことから、ケルク遺跡における副葬儀礼は小規模なものであったと解釈している。
 - 12) アブ・フレイラ遺跡、ハルラ遺跡、チャタル・ホユック遺跡という装身具の副葬が比較的多く確認された遺跡の報告をみると、装身具の副葬は女性の遺体に伴う割合が高いとの記述が共通して見られる。具体的なデータとして示されている例は限定的なもの、そのような事例が多く遺跡から得られるのは興味深い。装身具からみた新石器時代のジェンダーに関してはまた稿を改めて記したい。
 - 13) "... a kind of patterned activity oriented towards the control of human affairs, primarily symbolic in character with a non-empirical referent, and as a rule socially sanctioned"
 - 14) それぞれの住居に埋葬されている人骨の数は 1 ~ 13 体であると報告されている (Guerrero et al. 2009: Table 1)。少ない例があるため断定はできないが、それぞれの住居からまんべんなく人骨が検出されている事実は、被葬者がその住居と深い関連をもっていたことを示唆している。
 - 15) 報告者は世帯間を連結する役割を担う公共的な施設の存在を示唆しているものの、現段階ではそのような空間はハルラ型の遺跡では検出されていない (Kuijt et al. 2011)。
- 参考文献
- Akkermans, P. M. M. G., J. A. K. Boerma, A. T. Clason, S. G. Hill, E. Lohof, C. Meiklejohn, M. Le Mièrè, G. M. F. Molgat, J. J. Roodenberg, W. Waterbolk-van Rooyen and W. Van Zeist 1983 Bouqras Revisited: Preliminary Report on a Project in Eastern Syria. *Proceedings of the Prehistoric Society* 49: 335-372.
- Asouti, E. 2005 Group Identity and the Politics of Dwelling at Neolithic Çatalhöyük. In I. Hodder (ed.), *Çatalhöyük Perspectives: Themes from the 1995-9 Seasons*, 75-91. London, McDonald Institute for Archaeological Research and British Institute at Ankara.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2005 The Exploitation of Shells as Beads in the Palaeolithic and Neolithic of the Levant. *Paléorient* 31(1): 176-185.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. and N. Porat 2008 Green Stone Beads at the Dawn of Agriculture. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 105(25): 8548-8551.
- Bar-Yosef Mayer, D. E., B. A. Gümüş and Y. İslamoğlu 2010 Fossil Hunting in the Neolithic: Shells from the Taurus Mountains at Çatalhöyük, Turkey. *Geoarchaeology* 25(3): 375-392.
- Belcher, E. H. 2011 Halaf Bead, Pendant and Seal "Workshops" at Domuztepe: Technological and Reductive Strategies. In E. Healey, S. Campbell and O. Maeda (eds.), *The State of the Stone: Terminologies, Continuities and Contexts in Near Eastern Lithics*, 135-143. Berlin, ex oriente.
- Belfer-Cohen, A. 1995 Rethinking Social Stratification in the Natufian Culture: The Evidence from Burials. In S. Campbell and A. Green (eds.), *The Archaeology of Death in the Ancient Near East*, 9-16. Oxford, Oxbow Books Ltd.
- Bienert, H. D. 1991 Skull Cult in the Prehistoric Near East. *Journal of Prehistoric Religion* 5: 9-23.
- Byrd, B. F. 2000 Households in Transition Neolithic Social Organization within Southwest Asia. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organisation, Identity and Differentiation*, 63-98. New York, Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Calley, S. and R. Grace 1988 Technology and Function of Micro-Borers from Kumartepe (Turkey). In S. Beyries (ed.), *Industries lithiques. Traceologie et technologie*. 69-81. Oxford, BAR International Series 411.
- Coqueugniot, É. 1999 Tell Dja'de el-Mughara. In G. Olmo Lete and J. L. Montero Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates: The Tishrin Dam Area*, 41-55. Barcelona, Editorial AUSA.
- Davis, M. 1998 Social Differentiation at the Early Village of Cayönü, Turkey. In G. Arsebük, M. J. Mellink and J. Schirmer (eds.), *Light on Top of the Black Hill: Studies Presented to Halet Çambel*, 257-266. Istanbul, Ege Yayınları.
- Düring, B. S. 2003 Burials in Context: The 1960s Inhumations of Çatalhöyük East. *Anatolian Studies* 53: 1-15.
- Düring, B. S. 2005 Building Continuity in the Central Anatolian Neolithic: Exploring the Meaning of Buildings at Aşıklı Höyük and Çatalhöyük. *Journal of Mediterranean Archaeology* 18: 3-29.
- Düring, B. S. and A. Marciniak 2006 Households and Communities in the Central Anatolian Neolithic. *Archaeological Dialogues* 12(2): 165-187.
- Eckardt, H. 2004 The Social Distribution of Roman Artefacts: The Case of Nail-Cleaners and Brooches in Britain. *Journal of Roman Archaeology* 18: 139-160.
- Eicher, J. B. 1998 Beaded and Bedecked Kalabari of Nigeria. In L. D. Sciamia and J. B. Eicher (eds.), *Beads and Bead Makers: Gender, Material Culture and Meaning*, 95-116. Oxford and New York, Berg.
- Esin, U. and S. Harmankaya 1999 Aşıklı. In M. Özdoğan (ed.), *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization*, 115-132. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Fernandez, E., J. Ortiz, T. Torres, A. Perezperez, C. Gamba, M. Tirado, C. Baeza, A. M. López-Parra, D. Turbón, J. Anfruns, M. Molist and E. Arroyo-Pardo 2008 Mitochondrial DNA Genetic Relationships at the Ancient Neolithic Site of Tell Halula. *Forensic Science International: Genetics Supplement Series* 1(1): 271-273.
- Firth, R. 1951 *Elements of Social Organization*. London, Watts.
- Garfinkel, Y. 1994 Ritual Burial of Cultic Objects: The Earliest Evidence. *Cambridge Archaeological Journal* 4(2): 159-188.
- Goren, Y., A. N. Goring-Morris and I. Segal 2001 The Technology of Skull Modelling in the Pre-Pottery Neolithic B (PPNB): Regional Variability, the Relation of Technology and Iconography and their Archaeological Implications. *Journal of Archaeological Science* 28(7): 671-690.

- Guerrero, E., M. Molist, I. Kuijt and J. Anfruns 2009 Seated Memory: New Insights into Near Eastern Neolithic Mortuary Variability from Tell Halula, Syria. *Current Anthropology* 50(3): 379-391.
- Hamilton, N. 2005 The Beads. In I. Hodder (ed.), *Changing Materialities at Çatalhöyük: Reports from the 1995-99 Seasons*, 325-332. London, McDonald Institute for Archaeological Research and British Institute at Ankara.
- Horwitz, L. K. and A. N. Goring-Morris 2004 Animals and Ritual during the Levantine PPNB: A Case Study from the Site of Kfar Hahoreh, Israel. *Anthropozoologica* 39(1): 165-178.
- Jackson, B. 2005 Report on Bead Material Identification. In I. Hodder (ed.), *Changing Materialities at Çatalhöyük: Reports from the 1995-99 Seasons*, 373-375. London, McDonald Institute for Archaeological Research and British Institute at Ankara.
- Janowski, M. 1998 Beads, Prestige and Life Among the Kelabit of Sarawak, East Malaysia. In L. D. Sciamia and J. B. Eicher (eds.), *Beads and Bead Makers: Gender, Material Culture and Meaning*, 213-246. Oxford and New York, Berg.
- Jundi, S. and Hill, J. D. 1998 Brooches and Identity in First Century AD Britain: More than Meets the Eye? In C. Forcey, J. Hawthorne, R. Witcher (eds.), *TRAC 97. Proceedings of the Seventh Annual Theoretical Roman Archaeology Conference, Nottingham 1997*, 125-137. Oxford, Oxbow Books.
- Koutsadelis, C. 2007 *Mortuary Practices in the Process of Levantine Neolithisation*. Oxford, BAR International Series 1685.
- Kuijt, I. 2000 Keeping the Peace: Ritual, Skull Caching, and Community Integration in the Levantine Neolithic. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organisation, Identity and Differentiation*, 137-163. New York, Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Kuijt, I. 2008 The Regeneration of Life: Neolithic Structures of Symbolic Remembering and Forgetting. *Current Anthropology* 49(2): 171-197.
- Kuijt, I., E. Guerrero, M. Molist and J. Anfruns 2011 The Changing Neolithic Household: Household Autonomy and Social Segmentation, Tell Halula, Syria. *Journal of Anthropological Archaeology*, doi: 10.1016/j.jaa.2011.07.001.
- Molist, M. and J. M. Faura 1999 Tell Halula: un village des premiers agriculteurs-éleveurs dans la vallée de l'euphrate. In G. Olmo Lete and J. L. Montero Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates: The Tishrin Dam Area*, 27-40. Barcelona, Editorial AUSA.
- Moore, A. M. T. and T. I. Molleson 2000 Disposal of the Dead. In A. M. T. Moore, G. C. Hillman and A. J. Legge (eds.), *Village on the Euphrates: from Foraging to Farming at Abu Hureyra*, 277-299. New York, Oxford University Press.
- Özbek, M. 1998 Human Skeletal Remains from Aşıklı, A Neolithic Village near Aksaray, Turkey. In G. Arsebük, M. J. Mellink and W. Schirmer (eds.), *Light on Top of the Black Hill: Studies Presented to Halat Çambel*, 567-579. Istanbul, Ege Yayınları.
- Özdoğan, A. 1999 Çayönü. In M. Özdoğan (ed.), *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization*, 35-63. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Reese, D. S. 1982 Marine and Fresh-Water Molluscs from the Epipaleolithic Site of Hayonim Terrace, Western Galilee, Northern Israel, and Other East Mediterranean Sites. *Paléorient* 8(3): 83-90.
- Russell, N. and B. S. Düring 2006 Worthy is the Lamb: A Double Burial at Neolithic Çatalhöyük (Turkey). *Paléorient* 32(1): 73-84.
- Taniguchi, Y., Y. Hirao, Y. Shimadzu and A. Tsuneki 2002 The First Fake? Imitation Turquoise Beads Recovered from a Syrian Neolithic Site, Tell el-Kerkh. *Studies in Conservation*, 47(3): 175-183.
- Twiss, K. 2008 Transformations in an Early Agricultural Society: Feasting in the Southern Levantine Pre-Pottery Neolithic. *Journal of Anthropological Archaeology* 27: 418-442.
- Verhoeven, M. 2002a Transformations of Society: The Changing Role of Ritual and Symbolism in the PPNB and the PN in the Levant, Syria and South-East Anatolia. *Paléorient* 28: 5-13.
- Verhoeven, M. 2002b Ritual and Ideology in the Pre-Pottery Neolithic B of the Levant and Southeast Anatolia. *Cambridge Archaeological Journal* 12(2): 233-258.
- Wright, K. I. 2009 Beads and the Body: Ornament Technologies of the BACH Area Buildings at Çatalhöyük. In R. Tringham and M. Stevanović (eds.), *House Lives: Building, Inhabiting, Excavating a House at Çatalhöyük, Turkey. Reports from the Bach Area, Çatalhöyük, 1997-2003*, 17.1-44. Los Angeles, Cotsen Institute of Archaeology.
- Wright, K. I., P. Critchley, A. Garrard, D. Baird, R. Bains and S. Groom 2008 Stone Bead Technologies and Early Craft Specialization: Insights from Two Neolithic Sites in Eastern Jordan. *Levant* 40(2): 131-165.
- Wright, K. I. and A. Garrard 2003 Social Identities and the Expansion of Stone Bead-making in Neolithic Western Asia: New Evidence from Jordan. *Antiquity* 77(296): 267-284.
- 門脇誠二 2009 「西アジア新石器集落の崩落と再編成：世帯からの展望」西秋良宏・木内智康（編）『農耕と都市の発生』61-82頁 同成社。
- 小泉龍人 2001 『都市誕生の考古学』同成社。
- 筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団（編）2011 『ケルク新石器時代墓地にみる生と死』筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻先史学・考古学コース。
- 常木晃 2010 「頭蓋骨埋葬の二態」『歴史人類』38号 87-113頁。
- 常木晃 2011 「新石器時代の巨大集落—シリア、テル・エル・ケルク遺跡の2010年度調査—」『第18回西アジア発掘調査報告会報告集』30-34頁 日本西アジア考古学会。
- 常木晃・長谷川敦章 2010 「新石器時代の巨大集落—シリア、テル・エル・ケルク遺跡の2009年度調査—」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』31-36頁 日本西アジア考古学会。
- 増森海笑 D. 2011 「死者を飾るビーズ」筑波大学・シリア文化財博物館総局テル・エル・ケルク合同調査団（編）『ケルク新石器時代墓地にみる生と死』21-24頁 筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻先史学・考古学コース。
- 溝口孝司 1999 「考古学と空間的リアリティ」納富信留・溝口孝司（編）『空間へのパースペクティブ』101-129頁 九州大学出版会。
- 村上尚子 2008 「テル・アイン・エル・ケルクの新石器時代の墓地の位置付け」『史境』56号 103-118頁。

増森 海笑 D.

筑波大学大学院人文社会科学部研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員 (DC1)

Kaisho D. MASUMORI
University of Tsukuba

Research Fellow of the Japan Society
for the Promotion of Science